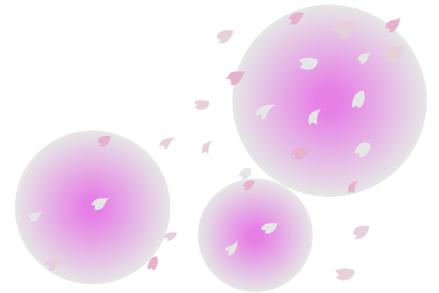


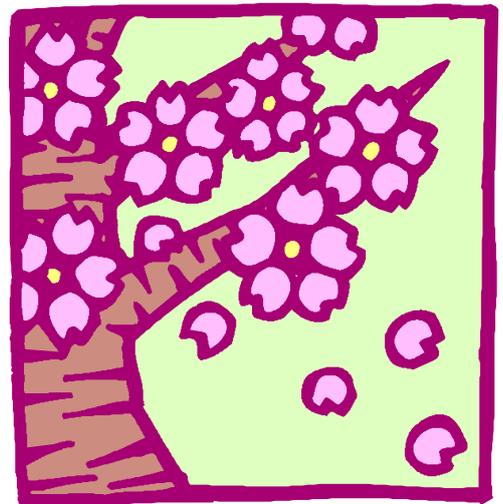
教えてください！

見附の桜



すっかり春めいて、桜の開花が楽しみな時期になってきました。
図書館では市民の皆さんから見附市内の桜についての情報をお寄せいただき、館内に「見附の桜情報コーナー」を作ろうと計画しています。

「の小路を入ったところにある桜」
「さんちの桜」など、見附市内の桜の
情報をお寄せください。
市民の皆さんのご協力をお願いします。



この企画には、市民運営のホームページ
「みつけドットコム」及び市内の写真サークル
「フォトサークル見附塾」「写団G」「フォト四季」
の協力を得て、ホームページでの公開を予定
しています。

館内の掲示板・電話・FAXへ情報お待ちしております。

見附市図書館 電話：62 - 3759

FAX：62 - 3740

URL：<http://www.lib.mitsuke.niigata.jp/>



利用時間が変わります！

土・日・祝日 午前9時30分～午後6時30分

4月より、土・日・祝日の閉館時間を1時間半延長します。ぜひ、ご利用ください。



こんな本を読みました！

図書館をご利用の方々から、興味を惹かれた本や面白かった本など、さまざまな視点で本を紹介していただきました。

新たな読書のきっかけに、あなたも手に取ってみませんか？

「桑港にて」 植松 三十里著（新人物往来社）
「JISハンドブック」 日本規格協会編集（日本規格協会）
「美人画報」 安野 モヨコ著（講談社）
「キノの旅」 時雨沢恵一著（角川書店）
「たすけ鍼」 山本 一力著（朝日新聞社）
「暮を打つ女」 シャン・サ著（早川書房）
「後鳥羽伝説殺人事件」 内田 康夫著（飛天出版）



『植松三十里さんの小説』

泉 博子 さん

「桑港にて」

初めての太平洋横断を果たした幕末の日本軍艦咸臨丸。その航海で病死した水夫の墓がサンフランシスコ郊外にある。この本は病気が治らず置き去りにされてしまった水夫達が皆で帰国するまでの苦労や心模様等が読み易いタッチで書かれている。

「もえたぎる石」

片寄平蔵の名を私は知らなかった。常磐炭田の開祖として知られている。彼は小さい頃、貧しく苦労を重ね、材木商となったが、同藩の数学者小野からの知識で、石炭探しに至る。苦労の末常磐炭田を開き幕末の日本に貢献したが、攘夷浪人の騙まし討ちに会い死んでしまうまでの激動の一代記である。

折から、NHK大河ドラマ「篤姫」の時代の話でもあり、大変興味深く読んだ。この他の植松さんの本もおもしろい。

『JIS マークに関する図書』

戸代新田町 T.I. さん

会社の仕事の延長で週に4～5日程図書館を利用させていただいています。2年前から ISO 関係、1年前から JIS 関係の資料を調べています。特に JIS に関しては、昨年3月に資料として4冊の図書をリクエストしました。今年の10月より JIS マークが変わります。親近感のある丸みのあるマークです。みなさんも年末の頃には新 JIS マークを目にしたいと思います。「JIS マークって何？」と思ったら図書館で本を開いてみてください。きっと JIS マークが可愛くみえますよ。

『私の図書館の楽しみ方』

大野 嘉子 さん

図書館は大好きですが、実のところ私は真面目な読書家ではありません。そんな私の図書館の楽しみ方をご紹介します。

話題のベストセラー本をチェックし、簡単おいしい料理本をパラパラめくり、永遠のテーマである若返りのためにファッション誌や「美人画報」で研究。時には「サラリーマン川柳傑作選」でクスッと笑い、小説やエッセイを読んで元気をもらうのです。そして館内で一番長い時間を過ごすのが児童書コーナーです。自然や動物がテーマの「たのしいふゆごもり」や、ワクワクする「かいけつゾロリ」などが私と娘のお気に入り、最近では落語ブームにのり、解説付きの「子ども落語」なども読んで楽しんでいます。

最後におすすめしたいのが、友人から面白いと聞いた本は好みではなくても読んでみることです。普段自分なら手に取らないであろう面白い本に出会うチャンスかもしれません。そして本大好きな輪を広げていきましょう。

『キノの旅』 時雨沢 恵一

小海 拓郎 さん

僕のお気に入りの本、それは時雨沢さんの書いた「キノの旅」です。この本の舞台は今から何十年も先の未来。主人公・キノが実在しないいろいろな国を訪れて旅をしていきます。「カメラの国」では、村長と写真を撮り、「絵の国」では戦車の絵を描き続ける画家と出会い…。ちょっと変わった国を3日だけ旅をしては、また別の国を目指していく、一話完結の短編集です。スリルあり、ユーモアあり、ときに感動あり。そして、一話ごとに意外な結末あり。とにかく、面白い！短編ならではの読みやすさと、ちょっとした時間でも気軽に読める手軽さも、おすすめポイントです。

同じ作者が書いた「アリソン」やその続編の「リリアとトレイズ」も面白いので、ぜひ読んでみてください。

『たすけ鍼』 山本 一力

『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・東京』 楡 周平

小坂井 一義 さん

この2冊は、時代背景の違いはあるが、性格、生活環境などがまるで違う登場人物が、前者は、小市民としてゆったりと、後者はエリートとしての立場を保つために、きりきりしながら生き抜いていく様子を描いてあり一気読みした、面白い小説だった。

「たすけ鍼」は作者の小説ではお馴染みの、登場人物の殆どが善意の職人や商人で、極端な悪役がでてこない、読み終わったあとにほのぼのする読後感の良い小説である。文中で必ず出てくる、池波正太郎ばりの料理の描写も楽しみの一つである。

「ワンス…」は六十年代の学生運動から始まり、三十年後の政界と官僚、そして医療の新興勢力のそれぞれの欲望が絡み進んで行く物語は、この本の広告どおり、平成の「華麗なる一族」という表現がふさわしいと思う。ひとくせもふたくせもある主人公たちが、己の欲望を満たすために必死なもの、ある意味での悪漢小説かもしれない。両極端ではあるが読み応えのある2冊だった。

『暮を打つ女』 シャン・サ

関 明日香 さん

個人的に、好きな著者で読む作品を選ぶほかに、図書館の書棚を眺めつつ、惹かれたタイトルや装丁などをきっかけに手にすることがよくあります。

ある時、フランス文学の棚にも関わらず、“暮”という言葉が使われているのに興味を惹かれ、手に取ったのが本書です(著者はフランス在住の中国人女性)。

舞台は1937年満州。地元に住む暮が得意な17歳の少女“わたし”と、素性を隠し、町で諜報活動をしている日本人士官の青年“私”が、暮を通じて心を交わしていくお話。

さながら暮を打ち合うように、それぞれを取り巻く状況が交互に語られていき、次第に近づく2人の距離。そして、時代の波に飲みこまれていく彼らの姿が切なく、印象的な一冊でした。

『内田康夫・名探偵浅見光彦シリーズ』

橋本 雅充 さん

図書館に行って、なにげなく借りた内田康夫の名探偵浅見光彦シリーズ。現在1～70迄読んでいます。パターンは同じだけど気軽に読みたくなる作品にできあがっているのも面白い。殺人事件を追って日本全国を駆けめぐる。その土地の風土、人々の気質、伝統、伝説などが、こまやかに読者に伝わる作品です。若いころは、自分も営業マンとして色々の土地で仕事をしていたことが有り、本を読んでいるとその場所が、すごく懐かしく感じることができました。又、行ったことのない土地は機会が合ったら行ってみたいと言う思いに駆立てる作品です。これからもシリーズ物の本を借りて楽しく読みたいと思います。